

國學院大學学術情報リポジトリ「K-RAIN」

『貧道集』の編纂意図：藤原教長の和歌と仏教：
特集日本文化研究の諸系譜

メタデータ	言語: Japanese 出版者: 公開日: 2023-02-07 キーワード (Ja): キーワード (En): 作成者: 荒木, 優也 メールアドレス: 所属:
URL	https://doi.org/10.57529/00001732

『貧道集』の編纂意図 — 藤原教長の和歌と仏教 —

荒木優也

一、はじめに

〈同じ〉ことと〈違う〉こととは、表裏一体の関係にある。

現代の我々には、〈同じ〉であることよりも〈違う〉ことのほうにより高い価値を認め、そこに新たな創造が生まれるように捉えるきらいがある。しかし、実際は「同じであればあるほど、多くが変化している」のであり、「何らかの記述命題を『真』に保つために、他の命題が変化しつづけている」¹⁾。つまりは、〈変化〉の結果として表出する〈違い〉の基底には、何らかの〈真〉を〈同じ〉に保とうとする働きが否応なく存在しているのである。表面上の〈違い〉が見えるか否かは〈同じ〉ことと〈違う〉こととの関係性によるのであり、表面上は〈同じ〉に見えても実は〈違う〉こともありうる。そうした時に、〈同じ〉であろうとする〈真〉に何を選び取り、何を〈変化〉させて〈違い〉を表出

させるかが重要となるだろう。蕉風において、〈不易流行〉が俳諧の本質を捉える言葉として提起されたのは、こういうことと〈違う〉こととの交響の系譜のなかに日本の韻文学が成立していることを暗示しているのであり、それはもちろん同じ韻文学である和歌においても言えることである。このように考えてみると、〈違う〉ことが生じる機縁として〈同じ〉であろうとすることが大きく関わっていることは明らかであろう。さらに踏み込んで言えば、〈同じ〉であろうとすることの〈祈り〉〈願い〉の中からこそ、今までとは〈違う〉、のちの時代のあらたな価値観を生む土壌が形成されるのではなからうか。

崇徳院近臣の藤原教長は、家集『貧道集』²をのこした歌人であるとともに、『古今和歌集』の注釈書(『古今和歌集註』)を著した歌学者でもあった。しかし、先学においては、『貧道集』雑部「十楽歌」序の『古今集』真名序を踏まえた文言「夫動天地感鬼神莫宜於和歌、又動仏界感聖衆惟同者歟」³がよく引用されるものの、教長に具体的にどのような和歌観があったかの検討は詳しく追求されず、またこれと内容的に関連性がある和歌についても詳しくは考察されていない。

本稿では、教長自身がその晩年に編んだとされる家集『貧道集』の編纂意図について考察する。この『貧道集』は、四季・恋・雑の部立で構成され、部立巻頭などの要所には崇徳院の命で提出した百首歌(『崇徳天皇初度百首』『久安百首』『句題百首』)を配置、雑部では所々に『古今集』真名序をふまえた文言を述べている。したがって、『貧道集』の編纂意識には『古今集』から続く政教的詩学があるものと考えられる。加えて、そこには和歌の伝統とは流れが〈違う〉仏教思想により『古今集』両序を補完していく態度が見られ、院政期における政教的詩学の一諸相が認められる。教長は、崇徳院崩御後も続く廷臣としての意識のもと、この政教的詩学を積極的に用いることにより、崇徳院と自分を以前と〈同じ〉でありながらも、かつ〈変化〉した関係性のなかに位置づけようとしたと考えられる。その〈変化〉

とは、教長の〈真〉を保つために生じたものであろう。したがって、藤原教長の歌学書『古今和歌集註』と家集『貧道集』後半の雑部を中心に取り上げ、崇徳院に仕える廷臣としての教長の和歌観を考究することは、日本文化における〈同じ〉ことと〈違う〉こととの交響の系譜、その一端を明らかにすることになるだろう。

二、藤原教長と家集『貧道集』

教長の伝記については、多賀宗隼・岩橋小彌太・高崎由里の三氏による詳しい調査がそれぞれある。⁽⁵⁾次に、高崎氏の論文をもとに教長の事蹟を抜粋して示し、教長の和歌活動を見てみよう。

天仁二年（一一〇九）師実五男忠教と醍醐源氏俊明女との間に出生。

保安四年（一一二三）新帝崇徳受禪。同日、教長新帝昇殿を聴される。

天承元年（一一三一）この年より崇徳内裏歌壇の活動が確認される。

永治元年（一一四一）崇徳天皇讓位。これ以前に『初度百首』。また、崇徳天皇献上の貫之妻白筆『古今集』を書写。

天養元年（一一四四）藤原顕輔に勅撰集詠進の院宣（院司・教長）

久安六年（一一五〇）『久安百首』詠進終わる（賜題は康治二年（一一四三））

仁平元年（一一五一）『詞花集』詠進。これ以前に『句題百首』。

保元元年（一一五六）保元の乱。出家（法名「観蓮」）。常陸に配流。

応保二年（一一六三）赦免・召還。しばし都に留まったあと高野山へ。

これ以降、多くの歌会（仁和寺・歌林苑等）に参加。

長寛二年（一一六四）崇徳院、松山に崩御。

安元二年（一一七六）元性法印（崇徳院皇子）に『古今集』下十巻を講義。

治承元年（一一七七）崇徳院本『古今集』書写。守覚法親王に『古今集』講義。

治承二年（一一七八）『別雷社歌合』出詠。

天承元年ころから崇徳天皇周辺では活発な和歌活動が確認でき、永治元年には崇徳天皇主催の『初度百首』が行われている。崇徳天皇は、在位時の『初度百首』以降、讓位後も久安六年の『久安百首』、仁平元年以前の『句題百首』と二度、計三回の百首歌を主催しており、教長は三度とも出詠している。また、崇徳天皇は自分のもとに貸し出された、紀貫之の妻自筆の『古今集』を教長に書写させている。このとき、写された『古今集』を崇徳院本『古今集』と言う。のちに教長は、この崇徳院本などをもとに『古今集』を講義・注釈している⁶。仁平元年には、崇徳院下命の勅撰和歌集『詞花和歌集』が詠進される。しかし、保元元年の鳥羽上皇崩御後、崇徳院は弟後白河天皇と権力を争って保元の乱で敗北し、四国に流罪となる。それに伴い、教長も出家して観蓮と名乗り（本稿では出家以降も教長と称す）、常陸に流されることとなった。教長は、応保二年に赦免されて都に戻るが、しばらくして、空海が開いた真言宗の本拠地である高野山に居を移す。また、都に戻ってからいくつかの歌会、たとえば仁和寺御室の歌壇などに参加していることが確認できる。長寛二年には四国松山で崇徳院が崩御、これ以降、都に還御することの出来なかつた崇徳院が怨霊になったという噂がささやかれることとなる。以降の教長の活動としては、仁和寺の元性法印（崇徳院皇子）や守覚法親王（後白河院皇子）に『古今集』を講義していることが注目される。『別雷社歌合』への出詠を最後に、治承四年（一一八〇）までには没したようである。

以上、見てきたように、教長の和歌活動において大きな比重を占めたのが、崇徳院と『古今集』であった。そして、

晩年の安元元年から治承二年あたりに編まれたのが、本稿でとりあつかう『貧道集』である。その成立に関して、『私家集大成』解題では次のように述べている。

貧道集は、収載歌数九七九首、四季・恋・雑の部立がある。現存本には後人の注記の混入がみられる（九四五左注）が、原型は教長最晩年の治承頃の自撰家集と推測される。ただし、治承二年三月の別雷社歌合などの歌も入集するものの、崇徳院（贈諡号治承元年七月二九日）を「讃岐院」と表記するなど、骨格になった草稿は安元末年頃までにはなっていたと考えられ、歌数の収載規模や、同様の徴証から、清輔集・重家集・長秋詠藻・林葉集・頼政集・林下集などとはほぼ同一の成立事情によってまとめられたと思われる。⁽⁸⁾

このように基本的には教長による自撰家集と捉えており、今日ではこの共通認識のもと研究が進められている。⁽⁹⁾その構成については、高崎氏が「非常に緊密な構成をもつ部類家集である。四七首もの釈教歌を持つという点も特色に数えられよう」と指摘し、黒田氏が入集している崇徳院主催の「三種の百首歌は抄出したうえで入れるのではなく、その全てを入れながら、あえてこれを部立の中に解体しているのである。〈略〉配列に目を転じると、四季・恋・雑部の始にはすべて初度百首がおかれる」と指摘しており、『貧道集』の構成要素として百首歌詠出歌が主となり、緊密な配列を形成するとともに、釈教歌に特色のあることがわかる。

百首歌三種それぞれの題の特色は、『初度百首』は堀河百首歌を踏襲したものの、『久安百首』は大枠（四季・恋および釈教・羈旅・神祇・慶賀無常・物名・離別・短歌（＝長歌））と歌数のみ指示、『句題百首』は堀河百首歌に永久百首題、為忠初度百首題を加味したものであり、これら百首歌において共通して規範とされていたのが『堀河百首』である。『堀河百首』とは、堀河院のころ大江匡房や源俊賴ら十六人（十四人）が詠んだ百首歌で、一首毎に題が細かく指定されている。代々の勅撰集に多くの歌が採られたこと（『金葉集』四一首、『詞花集』一〇一首、『千載集』七六首、

『新古今集』一九首)からもわかるように、のちのちにまで大きな影響があり、多くの歌人がこの堀河百首題で歌を詠んでいる。松野氏は「そもそも歌材・歌題の構成意識を撰集や歌書の組織の歴史の中にたどってみると、分類意識と配列意識の二要素があり(略)堀河院百首に到ると、初めて、勅撰集から凝縮されたが如くに両要素は融合され、(略)代々の勅撰集類の美的伝統によって蓄積された和歌的宇宙の公約数的なものが、質量ともに程よく網羅されている」とし、『堀河百首』以前でこういった質量ともに程よく網羅されて百に近い題を集成したものは、『和漢朗詠集』のみであると指摘している。⁽¹³⁾ 続けて「久安百首は(略)本質的な意味での堀河百首の継承があるように思われる。(略)一連の状況は、本百首を勅撰集資料としようとする企図があったことを示し、それが堀河百首と金葉集の関係に倣ったものであることを示唆する」(松野氏前掲論文)とも指摘している。このように家集『貧道集』で構成要素の主となっている三種の百首歌は『堀河百首』を継承していることから、『貧道集』の配列の論理には『堀河百首』の「和歌的宇宙の公約数的なもの」が基底にあると言えよう。ただし、『堀河百首』にはない特色として、釈教題が組み込まれていることが挙げられる。釈教題は『久安百首』にも見られるが、『貧道集』には『久安百首』以外の釈教題詠も入集している。つまりは、釈教歌が配列されている雑部には、『堀河百首』とは違う配列論理がある可能性が考えられるのである。

また、『貧道集』雑部には、教長の和歌活動において重きが置かれている『古今集』の真名序を詞書などで取り上げる「十架歌」が配列されている。したがって、雑部を考察することは『貧道集』の特色を明らかにするとともに、教長が真名序のもつ政教的詩学をどのように捉え、発展させたかを明らかにする糸口になるものと思われる。

三、釈教歌を詠むことの意味——『古今集』と『貧道集』の釈教歌——

『貧道集』の「貧道」とは、「仏道修行が未熟なこと、また修行未熟な僧。転じて、僧の謙遜の自称⁽⁴⁾」であり、ここに出家後の教長（観蓮）の僧としての意識が認められる。その歌僧教長（観蓮）が、『貧道集』に載せた釈教歌は次の歌々である。

法華經二十八品歌〔八三〇〕八四六 具經、結經を含む〕

『久安百首』釈教〔八四七〕八五二〕

不淨觀等その他〔八五二〕八五九〕

四弘誓願歌〔八六〇〕八六三〕

十樂歌〔八六四〕八七五〕

その他〔八七六〕

「法華經二十八品歌」は読んで字のとおり『法華經』を詠んだ釈教歌である。『久安百首』釈教の題を次にあげよう。

【十住心】

他縁大乘住心第六（法相宗）

覺心不生住心第七（三論宗）

一道無為住心第八（天台宗）

極無自性住心第九（華嚴宗）

秘密莊嚴住心第十（真言宗）

【歌題】

化縁大乘 五性各別

覺心不生 八不中道

一道無相 一乘仏性

極無自性三界唯心

秘密莊嚴即身成仏

『久安百首』の題は、大きな枠が指示されただけで細かい題が決まっていなかったため、具体的な題を選んだのは教長自身である。選んだ題は、空海の名著『秘密曼荼羅十住心論』および『秘藏宝鑰』で論じられる「十住心」に由来しており、『久安百首』のほかの歌人は選んでいない。在俗時の『久安百首』釈教題にこの「十住心」を選んだことと、出家後に高野山や仁和寺に向かうことは軌を一にする行動であろう。続いて、「不浄観」などその他の歌のあとに「四弘誓願歌」が配列されている。「四弘誓願」とは菩提心を発すときに立てるもつとも基本的な四種の誓願（衆生無辺誓願度」「煩惱無辺誓願断」「法門無尽誓願知」「無常菩提誓願証」）で「総願」とも言い、恵心僧都源信の『往生要集』大文第四「正修念仏」第三「作願門」には「菩提心（略）行相者。總謂之願作佛心。亦名上求菩提下化衆生心。別謂之四弘誓願（菩提心の略）行相とは、惣じてこれを謂はば仏に作らんと願う心なり。また、上は菩提を求め、下は衆生を化^すう心とも名づく。別してこれを謂はば四弘誓願なり」と記述¹⁵されている。この総願に続き、同じく『往生要集』で説かれる「十楽歌」が配列されている。「十楽」とは、極楽浄土における十種類の樂しみをさす。

大文第二欣求浄土者。極樂依正功德無量。百劫千劫説不能盡。算分喻分亦非所知。然群疑論明三十種益。安國抄標二十四樂。既知稱揚只在人心。今舉十樂而讚浄土。猶如一毛之滂大海（大文第二に、欣求浄土とは、極樂の依正の功德、無量にして。百劫・千劫にも説いて尽すことあたはず。算分・喻分もま知る所にあらず。しかるに群疑論には三十種の益を明し、安國抄には二十四の樂を標す。既に知んぬ、稱揚はただ人の心にあることを。今、十の樂を挙げて浄土を讚へんに、猶し一毛もて大海を濡^しらすが如し）。一聖衆來迎樂。二蓮華初開樂。三身相神通樂。四五妙境界樂。五快樂無退樂。六引接結縁樂。七聖衆俱會樂。八見佛聞法樂。九隨心供佛樂。十増進佛道樂也。（大文第二「欣求浄土」冒頭）

十楽歌にはこの『往生要集』の波線箇所と対応した序が付され、そこには『古今集』真名序が引用されている。釈

教歌では、この「十楽歌」にのみ『古今集』真名序が引用されている。

極楽依正、功德無量、算分喻兮（稿者注・分）非所知、今拳十楽而讚浄土、猶如一毛滯大海云云。而題此十楽之讚嘆、詠其十首之歌頌。夫動天地感鬼神、莫宜於和歌。又動仏界感聖衆惟同者歟。謂倭歌者我國之語也。漢土言偈頌、天竺三唱陀南。而顯經論之肝心、学仏法之髓腦、以偈頌為規模。因茲為我國風俗、以和歌展彼十楽、豈非至誠一心之讚嘆乎。隨則大聖文殊者諸仏智母也。代飢人正答班鳩宮太子之麗藻、称行基^三加贈靈鷲山釈尊之佳篇。加之弘法者東寺密法之曩祖也。湧五七六義之言泉、寄返報於高津焉。伝教者天台円教之先哲也。作三十一字之詞条、祈冥加於杣山矣。自爾以降、云貴賤云聖凡、無以和歌不通情。爰我等之懇志在極楽、以倭歌呈之。其詞云（極楽の依正、功德無量にして、算分喻分も知る所あらず、いま十楽を挙げて浄土を讚へむに、猶し一毛もて大海を濡らすがごとしと云云。而して、この十楽の讚嘆を題し、その十首の歌頌を詠ぜむ。それ天地を動かし鬼神を感じしむるは和歌より宜しきはなし。また仏界を動かし聖衆を感じしむるは、これ同じき者か。謂へらく倭歌は我國の語なり。漢土には偈頌を言ひ、天竺には唱陀南を云ふ。而して經論の肝心を顯し、仏法の髓腦を学ぶに、偈頌をもつて規模となす。ここに因りて我が國の風俗として、和歌をもつてかの十楽を展ぶ。豈に至誠一心の讚嘆にあらずや。随へば則ち大聖文殊は諸仏の智母なり。飢人に代はり正に班鳩宮太子の麗藻に答へ、行基^三加と称して靈鷲山に釈尊の佳篇を贈る。しかのみならず弘法は東寺密法の曩祖なり。五七、六義の言泉を湧かし、返報を高津に寄す。伝教は天台円教の先哲なり。作三十一字の詞条と作り、祈冥加を杣山に祈る。それより以降、貴賤と云ひ、凡と云ひ、和歌をもつて情を通ぜざるはなし。爰に我等の懇志、極楽に在り、倭歌をもつてこれを呈す。其の詞に云はく）。

冒頭では『往生要集』をふまえ、「極楽浄土とそこに住む人の功德は無量であり、それは具体的な数や比喩でも示

することができない。今、十楽を挙げて浄土を讚歎することは、あたかも少しの水で大海を満たそうとするようなものだ」と述べたあと、「そうではあるが敢えてこの十楽の讚歎を題として十首の歌頌を詠う」と続け、「それ天地を動かして鬼神を感じせしむるは和歌より宜しきはなし」と『古今集』真名序を引用したあとに、「また仏界を動かし聖衆を感じしむるは、これ同じき者か」と和歌は仏や聖衆の心を動かすことも同様に出来るのであると加える。その根拠として「わが国の語が和歌であるのに対して、漢土では偈頌、天竺では唱陀南という。漢土では天竺から伝わった仏教の経論の大事な意味を漢土の語である偈頌で顕わしている。したがって、わが国の和歌でも同様に天竺・漢土から伝わった経論の大事な意味を顕すことが出来るのではないか」という論理を作っていく。したがって「我が国の風俗として、和歌をもつてかの十楽を展べるのであり、「我が国の風俗である倭歌でも誠実な心は伝わるのだ」と述べている。続いてその具体例が示された後、最後に傍線部「貴賤と云ひ、凡と云ひ、和歌をもつて情を通ぜざるはなし」としめくくり終える。この序で注目したいのは、真名序との関係である。

動天地感鬼神化人倫和夫婦莫宜於和歌（略）其後雖天神之孫海童之女莫不以和歌通情者（天地を動かし鬼神を感じしめ、人倫を化し、夫婦を和ぐるは、和歌より宜しきはなし（略）その後、天神の孫、海童の女といへども、和歌をもちて情を通ぜざるはなし）。

真名序とは傍線部が対応し、「十楽歌」序ではそれに仏や聖衆が加えられている。実は、十楽歌序の文章と類似したものが、教長の『古今集』講義をもとにした注釈書『古今和歌集註』にみられる。「十楽歌」序の形成や意味を考えるためには、この『古今集註』との比較が必須であるため、次に言葉に注目して見ていきたい。

コ、二梵語者天竺之唱、漢語者唐朝之稱、和語者我國之詞、雖依所異名唯意趣惟同也。天竺世俗之文無傳、唯以經論察山矣。云佛云神莫以和哥不通情、思古案今爲述篇什早敬憤（略）至于哥人者、以人丸爲曩祖（略）唯以

古今和歌集為規模。末世之哥人又可守此末流而已（こ、に梵語は天然の唱、漢語は唐朝の称、和語は我国の詞、所に依りて名の異なるといへども、ただ意趣はこれ同じなり。天然世俗の文は伝はることなく、ただ経論をもつて杣山を祭す。仏といひ、神といひ、和哥をもつて情を通ぜざるはなし。古を思ひ今を案ずるに、篇什を述べれば、早く憤りを散らしたり。〈略〉哥人に至りては、人丸をもつて曩祖となす。〈略〉ただ古今和歌集をもつて規模となす。末世の哥人またこの末流を守るべきのみ。¹⁶⁾

「十楽歌」序末尾の傍線部「貴賤と云ひ、凡と云ひ、和歌をもつて情を通ぜざるはなし」は『古今集注』の「仏といひ、神といひ、和哥をもつて情を通ぜざるはなし」と、「仏といひ、神といひ」は「十楽歌」序最初の傍線部「また仏界を動かし聖衆を感じしむる」とも対応する。そして、次に二つの言葉に注目したい。それは二重傍線部「規模」と「曩祖」である。「規模」は、「十楽歌」序では「偈頌」、『古今集注』では「古今和歌集」、「曩祖」は「十楽歌」序では「弘法大師空海」、『古今集注』では「柿本人丸（人麿）」となっており、仏教と和歌の対応という共通項のもと、一対一、対応となっている。ここで注目したいのは、一対一で対応させている教長の思考方法である。これをふまえて次に「十楽歌」の歌自体を見ていくが、その前提として釈教歌の読み方にどのような種類があるかをおさえておきたい。釈教歌、とくに仏教經典の文句を題とした法文歌の詠作方法は大きく二つに分けられる。

- a. 具体的な經典の文句を詠み込む場合
- b. 関係のあり方を重ね合わせて詠む場合

a が直訳であるのに対し、b は必ずしも直訳ではなく、叙景歌に近づいていく。中には題を取り除いて単なる叙景歌として鑑賞することも可能なものも詠まれるようになる。

今回、取り上げる十楽歌は a に該当する。しかし、a の場合、今日では文芸的に価値がないものとして取り扱われ

												題(十衆)
												和歌
												「往生要集」
												讚・偈
⑩	⑨		⑧	⑦	⑥	⑤	④		③	②	①	
増進仏道衆	随心供仏衆	同右	見仏聞法衆	聖衆俱会衆	引接結縁衆	快樂無退衆	五妙境界衆	同右	身相神通衆	蓮花初開衆	聖衆來迎衆	
誰もみなわたす心を端として 上なき道にすすむなりけり	かたがたの仏に花をひきそへん わがこの国のあるじのみかは	やほよろづ春のすがたを拝みつ 聞きとし聞くも法ならぬかは	目にちかく月のみかほの照らさずは まことの道をいかで聞かまし	よそながら名をのみ開きて頼みこし ひじりとともに立居をぞする	大網はまづいづれをとわかねども 結びし契りとくぞみちびく	おしなべてみな楽しきをせきつれば うき世にかへる道はとぢてき	庭も台も池も植樹も 妙ならぬことのなきかな大空も	いさぎよき光さす身となりぬれば なにも心にかなはぬはなし	かずしらぬ仏の国もくらからず 身より光のさすにまかせて	ひらける蓮の花の樂しびは つゆも心ぞおきどころなき	唱へおきし阿弥陀は御名に応へてぞ あまた来まして今日は迎ふる	
往十方引接衆生、如弥陀仏大悲本願(略)無上菩提	彼土衆生、昼夜六時、常持種種天華、供養無量寿仏(略)供養 他方十万億仏	水鳥樹林、皆演妙法、凡所欲聞、自然得聞	彼国衆生、常見弥陀仏、恒聞深妙法	如經云、衆生聞者、应当發願願生彼国、所以者何、得与如是諸 上善人俱会一处	華嚴經普賢願云(略)一切円満尽無余、利益一切衆生界、無縁 尚尔、況結縁乎	彼西方世界、受樂無窮(略)処是不退、永免三途八難之畏、壽 亦無量、終無生老病死之苦	諸宝床座(略)宝池(略)宝樹(略)衆宝羅網、彌満虚空 一切万物、窮美極妙(略)彼世界、以瑠璃為地(略)	身相神通衆者、彼土衆生、其身真金色、内外俱清淨、常有光明、 彼此互照(略)又彼諸衆生、皆具五通、妙用難測、随心自在	身相神通衆者、彼土衆生、其身真金色、内外俱清淨、常有光明、 彼此互照	蓮華初開衆者、行者生彼国已、蓮華初開時、所有欲樂、倍前 百千	念仏功積、運心年深之者、臨命終時(略)弥陀如来以本願故、 諸菩薩百千比丘衆、放大光明、浩然在目前	
竜樹偈	竜樹偈	同右	竜樹讚	竜樹偈	竜樹偈	竜樹偈	世親偈	同右	竜樹偈	竜樹偈	竜樹偈	

てきたきらいがあった。しかし、本当に価値がないものと考えるべきであろうか。むしろ今の感覚とは違った価値があったと考えた方が有益ではないだろうか。

具体的に歌を見てみると、和歌と『往生要集』の直訳的な対応が前の表からわかる。たとえば、④下句「妙ならぬことのなきかな」は、『往生要集』の「一切万物、窮美極妙」の翻訳である。また、「大空も庭も台も池も植樹も」は『往生要集』の言葉「虚空」「宝床座」「宝池」「宝樹」と対応、⑥下句「結びし契り」は「引接結縁楽」の「結縁」と対応する。このように十楽歌は、直訳的に『往生要集』の文句と対応するのである。このように仏教語と歌語を一对一対応させる教長の態度は『古今集注』の歌の解釈にも認められる。

教長は、梅のほひ（香り）を詠んだ「ちると見てあるべきものを梅花うたてにほひの袖にとまれる」（『古今集』春上・四七／素性法師）に天台宗において重要な『摩訶止観』を対応させる。

然則以和哥戲論之奇語、翻蓋爲菩提涅槃之良縁。況乎大日周遍之戒香者、一春梅香之芬芳也。一色一香無非中道之故、豈此議違哉（然れば則ち和哥戲論の奇語をもつて、翻して蓋ぞ菩提涅槃の良縁と為ざらむ。況んや大日周遍の戒香は、一春梅香の芬芳なり。一色一香、中道にあらざることなき故、豈にこの議違はむや）⁽¹⁷⁾。

この態度について、岡崎真紀子氏は「教長の注は、歌の語句を解釈したうえで、それを仏教経典に付会することによって、和歌は仏の教えを体現しているものだと論じることを、注釈の落としどころとしているのである」と指摘するが、加えて言葉を一对一で対応させることによって、和歌と仏教とのつながりを確実なものにし、和歌の可能性を広げようとする態度が教長にはあるのではなからうか。こういった和歌の世界を広げる態度は、同時代の西行や、あとの世代の慈円にも見られる。⁽¹⁸⁾

同時代の和歌の可能性を広げる行為と勘案するならば、教長の直訳とも言うべき釈教歌の読みぶりは、真名序を

「十楽歌」序に引用して背景とすることで、和歌の言葉に仏教の概念を取り込む、和歌の世界を広げていく行為として捉えるべきではないだろうか。

教長は、なぜこのような営為を『貧道集』において行う必要があったのだろうか。

四、崇徳院追慕と報徳——『久安百首』長歌改作と『貧道集』巻末の配列——

『貧道集』巻末には『久安百首』の長歌が配列されている。() 内の異本注記は『久安百首』の本文である。

讃岐院百首歌奉れとおほせられし時、添へて奉れる長うた

A 梓弓 [春] たちぬとや み吉野の 山に霞の 棚引けば 木の芽も今は 張りぬらんいつしかとのみ花待つと

このもかのもとに 立ち交じり 家路忘る、 甲斐もなく 咲けばかつ散る はかなさを あはれいつまで 歎きつつ

B わが身の上に 成る道も (成り果てむイ) 事をば 知らで [夏] 来れば 繁き梢に 啼く蟬の 空しき殻と [秋] はなる

C かくは 常なき世なれども くまなき月を ながむれば もの思ふことも 忘れて心一つぞ 誇らしき

D さての つもりは 老いらくの 身に責めくるも 白露の 霜としなれば [冬] の野に むらむら 見ゆる 草の上は

みな白妙になり けりこればよそと 思ひこしわが身汝が身も 今はまだ 黒き筋なき 滝の糸の

E くるくる君につかふとて 思ひ離れる (思ひ離れぬイ) うき世なりけり [九七九]

『貧道集』前半の四季部に対応するかのように長歌では、春夏秋冬の進行が詠まれ、それにみずからの人生、老いさらばえていく様が重ねられている。こういった無常への歎きが詠まれる中で、異色を放つC末尾「心一つぞ誇らしき」の語には、「くまなき月をながむれば」がかかるが、なぜ月を見ると誇らしく思えるのであろうか。「月」は釈迦の象

徴であり、「真如の月」を示す場合もあるが、Dでは、「さてのつもりは老いらくの」が「おほかたは月をもめでじこれぞこの積れば人の老となるもの」〔『伊勢物語』八十八段〕を想起させるため、誇らしいつもりで月を見ていたけれど身に無常が責め来るの意となり、表面の文脈上では「真如の月」とは考えられない。おそらくCは月を見ながらの歌会、宴のことを詠んでいるのであり、崇徳院のもと和歌に関わる者の誇りが表出されているものと考えられる。それは、長歌の構成を考えることによっても明らかになる。

花と月について詠むACでは、花月詠の常套句を多く用いることから、ACは和歌に関わる行為を詠んでいる箇所と捉えるべきであろう。例えば、「春立つといふばかりにや三吉野の山も霞みて今朝は見ゆらん」〔『拾遺集』春・一／壬生忠岑〕や「この里に旅寝しぬべし桜花散りのまがひに家路忘れて」〔『古今集』春下・七二／読人不知〕などが踏まえられている。それに対して、BDでは無常を詠んでおり、ACの和歌に関する行為と対立している。そして、このように和歌と無常とが交互に詠われていることから、無常Dの次のEは和歌に関する行為が詠まれていると考えられる。つまり、E「くるくる君につかふとて思ひ離れる（思ひ離れぬイ）、うき世なりけり」と崇徳院に仕えてきたことと和歌に関する行為とが重なり合うことを暗示する。ここに和歌と君臣との密接な結びつきが認められるのである。『久安百首』の「思ひ離れぬ」の本文ではこの君臣関係こそが無常に優先すべきものとして詠まれるのである。

ただし、『貧道集』収載歌では、『久安百首』の際に詠まれた本文と違う箇所があり、現存本では『久安百首』の本文が異本注記の形で残されている。おそらく、教長が『久安百首』の長歌を『貧道集』に入れる際、改作したものと推測される。「成る道も（成り果てむイ）」の『久安百首』本文「成り果てむ」は花が咲けばすぐ散るはかさなは自分にも同様に訪れるのだということを詠んでおり、末尾「思ひ離れる（思ひ離れぬイ）うき世なりけり」の『久安百首』本文「思ひ離れぬ」は崇徳院に仕えているので憂き世（つらい世の中）から離れることができない（出家することもできない）

と詠んでいる。これは平安朝の長歌に典型的な訴嘆調をふまえて詠まれたものである²⁰。それに対して『貧道集』では「成り果てむ」を完全に悟る意の「成る道も」に変えて仏道の成る道とは知らずに和歌に励んださまとし、末尾も「思ひ離れぬ」を憂き世から離れることが出来る意の「思ひ離れる」と変えることで、君臣関係を無常を乗り越える機縁として捉え直している。

この二箇所²¹の改作により、『久安百首』では単なる訴嘆調だった長歌が『貧道集』では崇徳院と歌の場を共有したことによって自分は救われたのだという、院に対する恩愛と感謝の念を詠んだ歌へと変化したのである。

この態度の根拠となるのは、空海「仏経を講演して四恩の徳を報ずる表白一首」などにも見られる四恩である²¹。四恩とは、この世で受ける四つの恩①父母、②国王、③衆生、④三宝（仏・宝・僧）を指し、崇徳院は②国王の恩にあたる。

また、崇徳院が歌人たちに多く慕われていたという事実も看過できない。西行は保元の乱後、敗れた崇徳院が剃髪したことに對して、崇徳院の運命に対する深い悲しみを詠んでいる（『山家集』雜・一二二七〜二九番歌）。

世中に大事いできて、新院あらぬ様にならせをはしまして、御髪おろして仁和寺の北院におはしましけるに、まいりて、兼賢阿闍梨いであひたり、月あかくてよみける

かゝる 世に影もかはらずむ月をみる我身さへ恨めしきかな

讚岐におはしましてのち、哥と云事の世にいと聞こえざりければ、寂然がもとへいひつかはしける
言の葉のなさけ絶えにし折節にありあふ身こそ悲しかりけれ

かへし 寂然

しきしまや絶えぬる道になく／＼も君とのみこそ跡を忍ばめ

西行は、新院崇徳院が思いもよらない運命に陥つたことを悲しみ、対する寂然の返歌では崇徳院がいなくなる事によって和歌の道が途絶えてしまうと詠む。また、藤原俊成のもとには亡き崇徳院から長歌が届けられている⁽²²⁾。俊成は、崇徳院の弟後白河院崩御の際も長歌を詠むが、その長歌について渡部泰明氏は「ひたすら崇徳院への追慕に比べれば、後白河院への思いには、いくばくかの距離感・疎外感を宿らせている節がある。逆にそれだけに、後白河院追悼の表現から崇徳院哀悼の情念を透視してよいように思うのである⁽²³⁾」と述べており、俊成と崇徳院との深い繋がりに言及している。歌人たちにとって崇徳院は、慕うべき大切な存在であり、教長にとっては自分を来世に導いてくれる存在であった。そういった意味では、崇徳院は教長にとって四恩のうち②国王のみならず、仏教の智慧を授けてくれる④三宝（僧宝）であったのだとも考えられる。

以上、長歌の改作が来世に導いてくれる存在として崇徳院を捉え直す行為であったことを指摘した。これは、『貧道集』末尾の配列からも肯定できるものと考えられる。本稿二節において『貧道集』雑部の配列には『堀河百首』とは違う枠組の論理がある可能性に言及したが、その一つの論理が『和漢朗詠集』だと考えられる。「堀河百首題そのものが朗詠集題に遡行してゆく要素のあること⁽²⁴⁾」を勘案すれば、それは決して不自然なことではないだろう。次に『和漢朗詠集』下の題を示し、『貧道集』雑歌部の詞書と一致するものには傍線を付した。

風 雲 晴 曉 松 竹 草 鶴 猿 管絃付舞妓

文詞付遺文 酒 山 山水 水付漁父 禁中 故京 故宮付故宅

仏事 仙家付道士隱倫 山家 田家 隣家 山寺 僧 閑居

眺望 餞別 行旅 庚申 帝王付法皇 親王付王孫 丞相付執政

將軍 刺史 詠史 王昭君 妓女 遊女 老人 交友 懷旧

述懐 慶賀 祝 恋 無常 白

完全には一致しないが、主要な部分に関しては『和漢朗詠集』と配列が重なっている。ただし、二重線に関しては、その内容からその題と読み取れるものである。まず、遊女・老人にあたる『貧道集』雑歌・九四六〜七番歌を取り上げてみよう。

遊女不定宿 句題百首

かりの世を思ひ知てや白浪のうきたる舟によるべ定めぬ（九四六）

齡及七旬情迷六義、然而猶携君之風骨養我之露命、

再遇中興之節、將動下愚之性而已

歳よれるおもての浪も忘られてころは和歌の浦にかへりぬ（九四七）

九四六番歌は『句題百首』の歌で、「遊女不定宿」の題から「遊女」に対応すると考えて良いだろう。また、九四七番歌は「老人」という題ではないが、詞書に「齡及七旬」と七〇におよぶ年齢、初句に「歳よれるおもての浪も」と皴が詠まれていることから「老人」題と内容が重なる。さらに、ここで注目したいのは「情迷六義」という文である。「六義」とは『古今集』両序にいう和歌の六義のことであり、それに「迷う」つまりは和歌に心をまどわせたと述べている。

また、『和漢朗詠集』の末尾は無常・白であるが、この配列が『貧道集』では意識されたのではないだろうか。『和漢朗詠集』無常の冒頭には、「観身論命」²⁵が配列されており、『貧道集』巻末（雑歌部・九七四〜九）も改作長歌の前に「観身論命」（九七四〜八）が配列されている。²⁶このように無常と対応することから、『貧道集』の改作長歌は「白」と捉えるべきであろう。『和漢朗詠集』の「白」には白の言葉・概念が入った詩歌が配列されているが、改作長歌でも末尾で「黒き筋なき 滝の糸の」と白髪を詠んでいる。

そもそも「白」とは何を示した題なのだろうか。三木雅博氏は「『白』は『終わり』にして『始まり』の意味を持った部立である」と指摘し、菅野禮行氏は「『無常』の後に『白』を置いて巻を終えた公任の思いは、鎮魂と再会の願いをこめたものでもあった」と指摘している²⁷。教長が改作長歌を「白」として末尾に配列したのも、崇徳院の鎮魂と来世における再会を願ったものと捉えるべきであろう。

五、おわりに

本稿では、藤原教長の『貧道集』雑部を中心にしながら、その編纂意図を考察してきた。その意図は、雑部巻末長歌の改作により「四恩」のうち三宝（僧宝）として崇徳院を捉え直し、その長歌を「白」題として『貧道集』末尾に配列することで、鎮魂と来世での再会とを願ったものと考えられる。また、教長の「十楽歌」には、『古今集』真名序の論理に仏教を重ね、歌語に仏教語を重ねることで、仏教の概念を取り込み和歌の世界を広げることにより、崇徳院と教長をつなぐ和歌をより普遍的なものにしようとする営為のあったことが認められよう。

教長は、現世からはもう「思ひ離れ」るが、来世も〈同じ〉く崇徳院に仕えること、現世も来世も「くるくる君につかふ」その〈真〉に保つために〈祈り〉〈願う〉長歌を詠った。その〈祈り〉〈願い〉が、歌語にそれまでとは〈違う〉意味づけを与え、和歌そのものを〈変化〉させていく力となったのである。日本文化における〈同じ〉と〈違う〉との交響の系譜の一端が、ここに垣間見られる。

註

- (1) G. ベイトソン「目的意識がヒトの適応に及ぼす影響」(『精神の生態学』改訂第2版、新思索社、二〇〇〇年。原書一九七二年)。
- (2) 『前参議教長卿集』とも。以下、本稿における和歌本文の引用は、私家集を『私家集大成』(日本文学WEB図書館)、それ以外を『新編国歌大観』(日本文学WEB図書館)に拠った。ただし、引用の際に漢字をあてるなど私に表記を変えた箇所がある。また、『貧道集』の漢文箇所は先行研究などをふまえ、私に訓読した。
- (3) 藤原教長『古今和歌集註』序(仁治二年(一二四一)写本)。本文は京都大学電子図書館による。
- (4) 辰巳正明「曹丕と日本文学」(『日本文学論究』七四冊、二〇一五年三月)
- (5) 多賀宗隼「参議藤原教長傳」(『鎌倉時代の思想と文化』目黒書店、一九四六年。初出一九三九年四月)。岩橋小彌太「藤原教長」(『国語と国文学』三〇巻一、二号、一九五三年十二月)。高崎由里「藤原教長年譜」(『立教大学日本文学』五六、一九八六年七月)。
- (6) これら『古今集』書写や注釈については浅田徹氏らにより詳細な研究がある。浅田徹「教長古今集注について―伝授と注釈書―」(『国文学研究』一二二号、一九九七年六月)、浅田徹「教長古今集注と始発期古今伝授の諸問題」(『和歌文学研究』七七号、一九九八年二月)など。
- (7) 『百練抄』八・高倉院治承元年(一一七七)七月二十九日条「讃岐院奉號崇徳院、宇治左府贈官位(太政大臣正一位)、事宣下、天下不静、依有彼怨靈」(新訂増補国史大系)。
- (8) 『私家集大成』解題(松野陽一執筆。明治書院、一九七五年)。なお、松野陽一「安元・治承成立の歌集群」(『鳥

帯 千載集時代和歌の研究』風間書房、一九九五年）にも詳述されている。

(9) 教長の家集および和歌の先行研究としては、今まで取り上げたもの以外に以下のもの等が挙げられる。

・西村洋子「教長の和歌の世界」（『仏教大学大学院紀要』二五号、一九九七年三月）

・黒田彰子「貧道集について」（『俊成論のために』和泉書院、二〇〇三年。初出二〇〇〇年三月）

・黒田彰子「貧道集の題詠歌」（『俊成論のために』。初出二〇〇〇年十二月）

・黒田彰子「教長の古典撰取」（『俊成論のために』。初出二〇〇〇年十一月）

・稲田利徳「藤原教長の『貧道集』と『伊勢物語』」（『岡山大学教育学部研究集録』一一五号、二〇〇〇年十一月）

・拙稿「藤原教長「十楽歌」の形成」（『万葉集と東アジア』2、二〇〇七年三月）

・金子英和「藤原教長十楽詠をめぐって」（和歌文学会例会口頭発表、二〇一二年七月）

・太田克也「藤原教長の初学期の周辺―興福寺歌壇との関わりを中心に―」（『和歌文学研究』一一一号、

二〇一五年一二月）

(10) 注5高崎論文。

(11) 注9黒田「貧道集について」。

(12) 同右黒田論文。なお、『句題百首』については、藏中さやか「崇徳院句題百首考」（『題詠に関する本文の研究

〈大江千里集和歌一字抄〉おうふう、二〇〇〇年。初出一九九四年）参照。

(13) 松野陽一「組題構成意識の確立と継承」（『鳥筥』、初出一九七四年一月）。

(14) 『岩波仏教辞典』第二版。「中国では早くから用例が見える」とされる。日本の古例としては、「伝教大師消息」

や『遍照発揮性霊集』巻第一「贈野陸州歌并序」に既に認められる。

(15) 本文は大正蔵、訓読文は岩波日本思想大系によった。

(16) 注3教長『古今和歌集註』序。私に訓読した。

(17) 注3教長『古今和歌集註』巻一・四七番歌。この箇所は『摩訶止観』巻第一上「序分」の「繫縁法界一念法界。一色一香無非中道。己界及佛界衆生界亦然（縁を法界に繋げ、念を法界に一うす、一色一香も中道にあらざることなし。己界および仏界、衆生界もまたしかり）」（大正蔵。訓読は岩波文庫による）に対応する。また、「翻して」は、『和漢朗詠集』下・仏事・五八八・白居易を踏まえている（角川ソフィア文庫）。

願以今生世俗文字之業狂言綺語之誤（願はくは今生世俗文字の業 狂言綺語の誤りを以て）
 翻為当来世世讀仏乗之因転法輪之縁（翻して当来世世讀仏乗の因 転法輪の縁と為む） 白

(18) 岡崎真紀子「顕昭の歌学と音韻相通説」（『奈良女子大学大学院人間文化研究科年報』二九号、二〇一四年三月）
 (19) 拙稿『法華経』を詠んだ和歌―『法華経』と歌枕との共鳴―（『聖なる声―和歌にひそむ力』三弥井書店、二〇一一年）において、和歌の「内」と「外」をつなげる、または重ねる行為として、慈円が法華経廿八品歌で歌枕を読み込んでいることを指摘した。

(20) 訴嘆調については、藤岡忠美「曾禰好忠の訴嘆調の形成―古今集時代専門歌人からの系譜―」（『平安和歌史論』桜楓社 一九六七年）参照。

(21) 空海「仏経を講演して四恩の徳を報ずる表白一首」（『続遍照發揮性霊集補闕抄』巻第八（日本古典文学大系、岩波書店）。『遍照發揮性霊集』は、巻一―七を空海の弟子真済が編纂、巻八―十を承暦三年（一〇七九）に仁和寺の学匠・済暹が補綴している。

又、夫れ此の身は虚空より化生するにも非ず、大地より変現するにも非ず。必ず四恩の徳に資けられて是

に五陰ごおんの体を保つ。所謂四恩とは一には父母、二には国王、三には衆生、四には三宝なり。〈略〉父母我を生ずと云ふと雖も、若し国主無くは強弱相戦ひ、貴賤きうけん劫奪こくたつして身命しんみやう保ち難く、財宝何ぞ守らむ。万生ばんせいの室宅しつたくを安むじ、四海の康哉かうさいを与ふ。其の官邑を封じ、其の爵禄を授く。現世げんぜの顕榮けんえいをなし、後葉の美声を流す、国王の力只能く然らしむ。〈略〉風ほのかに聞く、三世の如来、十方の菩薩、四恩の徳を報じて悉く菩提を證す。

(22) 増補本系『長秋詠藻』五八一―五八四番歌(古典文庫)。崇徳院からの長歌は、「崇徳院讃州にして隠れさせ給て後、御供なりける人の辺より伝えて、かゝることなんありしとて、折紙に御宸筆なりける物を伝へ送られたりしなり」という詞書の後に掲載されている。

〈前略〉一たび南無なむといふ人を捨てぬ光に誘はれて玉をつらぬるこのしたに花ふりしかん時にあはば契おなじき身となりてむなしき色に染めおきし言の葉はごとにひるがへしまことの法となさんまであひ語らはむことをのみ思ふ心を知るや知らずや(五八一)

花が降り敷くとは極楽往生を意味し、傍線部は注14『和漢朗詠集』白居易の句をふまえる。極楽往生した来世において和歌が仏法となるまで語り明かしたい、その気持ちをはわかってくれるかと、崇徳院は俊成に詠みかけている。それに対して、俊成は次のように詠んでいる。

〈前略〉後の世にだに契りありて蓮の池に生まれあはば昔も今もこの道に心をひかむ緒人はこの言の葉を縁として同じ御国に誘はざらめや(五八三)

崇徳院、俊成ともに、現世ではもう叶うはずのない、昔と〈同じ〉関係の再来を来世に願う人たちであった。

(23) 渡部泰明「藤原俊成 和歌にみる生と死」(『国文学 解釈と鑑賞』八一六、一九九九年五月)。

(24) 注13松野論文。

(25) 『和漢朗詠集』下・無常・七八九(角川ソフィア文庫)

観身岸額離根草(身を観ずれば岸の額に根を離れたる草)

論命江頭不繫舟(命を論ずれば江の頭の繋がざる舟)

羅維

(26) 『貧道集』雑・九七四〜九七八番歌・観身論「観身論命且暮在近、述懷言志心情、覽休但寄源流愁呈雜体(以下、混本歌・長歌(短歌)・旋頭歌・短歌(長歌)・返歌が続く)」

(27) 三木雅博「『和漢朗詠集』の部立「白」に関する考察」(『和漢朗詠集とその享受』汲古書院、一九九五年、初出一九九三年)。菅野禮行「部立「白」に関する試論」(新編日本古典文学全集『和漢朗詠集』小学館、一九九九年)。